

「一晩だけ」のはずが

むき出しの段ボール箱で代用したテレビ台に最近、淡い緑色の布をかけた。「少しは雰囲気や和らぐかと思って」と塙(はなわ)光一さん(43)。愛知県豊田市の県営住宅の6畳間。隣の妻幸さん(43)に目をやり「もう、ここにきて1カ月だもんな」とつぶやいた。

漂流するような日々だった。3月11日、福島県大熊町の自宅間際まで押し寄せた津波で、幸さんは娘の梨奈さん(18)、沙也加さん(14)を連れて町内の避難所へ。夜には職場から光一さんも合流。「家も家族も無事だったから一晩だけのつもりだった」

それが一変したのは福島第1原発1号機が爆発した翌12日。自宅から原発まで、わずか1*しかかない。

原発1号機からの避難 いつの日か

— 1 —

避難所を飛び出し、各地を回って集めたガソリンは30%。「とにかく走りだそう」。あてはなかったが、光一さんは西へとアクセルを踏んだ。

県境を越えて新潟県に入ったところ。ずっと圏外だった幸さんの携帯電話が、おばからのメールを次々と受信する。「大丈夫？ 豊田においでよ」

それだけを頼りにたどり着いた街で、被災者用の県営住宅に入居した。

今、即席のテレビ台に載った液晶画面が映し出すのは、無残な姿をさらす福島原発のニュースだ。「安全だと信じていたのに。裏切られた」。見通しのない避難生活は、2カ月目に入った。

◇

東日本大震災では、多くの人々が住み慣れた土地を追われ、避難先での生活再建に直面している。塙さん家族の日常から、「家族の復興」を見つめる。